

20 髭題目に込められた祈り

粟井字久田445番地の4にある写真の題目石は、土地の人であれば誰でも知っています？ しかし、なにゆえ建立されたものか、果たして、何人の人が知っているのでしょうか。この題目石は、古墳に埋葬されていた組合式石棺の身6枚の部材をもって制作されています。



嘉永5年木村氏建立と伝わる題目石

使用石材は、今は国指定史跡となっている兵庫県高砂市の竜山石採石場で採取され瀬戸内海、足守川伝いに水上運搬されました。この石棺の蓋石(2m×1m)を柱石とし、南無妙法蓮華經の七文字が法華独特の髭文字で深々と刻まれています。底石(2m×1m)は大台石に、側石(1.7m×0.6m)2枚は笠石と小台石に、小口石2枚は大台石の下に基礎として敷いてあります。(吉備郡史：但し、小口石2枚は現場では見えません。…つまり、移転か?) 嘉永5年(1852)、木村七郎左衛門の建立と伝わります。

この題目石について、吉備郡史は、「蓋し天下一品とも言うべき巧妙なる意匠に成れるものと言うべし」と賛し、一方、備中誌は、「田夫野人の為に其の跡を失いぬるぞ豈千歳の遺恨ならずや古墳の亡霊も心なしと言うべからず」と、はなはだ辛口です。史書編集者の賛否は置いて、なんとか題目石建立の経緯を伺い知ることはできないものか。キーワードは嘉永5年です。

この年の岡山大水を「岡山県の災害」(岡山文庫142蓬郷巖著)は次のとおり記します。

- ・流死者5人、山崩れによる死傷者15人
- ・家屋の流壊585軒・半壊308軒
- ・田畑の荒廃9712町
- ・溜池の決壊23ヶ所
- ・山抜・山崩れ1887ヶ所

なお、これは、備前岡山藩の記録であるため、その領域内の災害だけである…と。

しかし、これほどの災害が備前領に接する大井郷で無かったとするのは甚だ得心のゆかぬところ。なんぞ手がかりはないか…。

果たして、かつて足守藩木下家の御領内であった総社市久米の御崎神社神主石井勝典が書き残した「極楽浄土行次、地震、雷、洪水の全」(石井家文書)に次の記録が見えました。

嘉永5年7月12日夕、俄に大雨。21日夕大風。8月19日、巳の下刻大地震、雷の如く鳴り、不審に在る所、22日の暮方より、子の刻迄大風、大雨にて当国、備前、作州とも大水にて、所々の山分はくずれ、或いは水吹き出し、道、橋はいうに及ばず、高き所は岸くずれ田畑大破損。京山の左右はいうに及ばず、下神平の山は途中よりくずれ、水吹きだし立木を流し、東坂は道中へ岩を押出し、宮脇の池の土手、池新田池の古土手もくずれ久米村中の池切れ居持山釣溝の上山もくずれる…。(広報総社歴史シリーズ「総社市再発見」)



嘉永5年7月日為水死諸霊菩提と刻む地藏石仏

ここまでくれば十分でしょう。地震のおまけまで付いています。(なお、地震被害は無かった模様。というより、地震発生そのものが疑問視されています。)

皆様の中には、去る平成30年8月の当会で紹介いたしました「金石文で読み解く地域の小水害史」中の、阿曾宮原大池の嘉永5年7月日為水死諸霊菩提也と刻む石地蔵を思い出された方がいるでしょうか。かの地蔵こそ、石井神主が書き残した記録の証人です。やはり、その年の大雨で大池が決壊し死者が出たものに間違いのないでしょう。

このように、被害区域が備前領から備中阿曾村まで広がれば、真ん中の大井郷が無傷に済むはずはありません。

岡山県教育委員会の百田古墳群の調査記録に、当該古墳群は11基の円墳・方墳からなり、うち横穴式石室を持つ2号墳は墳丘流失とあります。実は、百田古墳群は、題目石のある場所から標高差+50m~+100mの谷奥の尾根伝いにあります。つまり、嘉永5年の大雨による土石流で2号墳の石棺が龍王谷の谷口あたりまで押し流されたのではないのでしょうか。その時、久田、百田の谷あいでも、山分はくずれ、或いは水吹き出し、池の古土手もくずれ、高き所は岸くずれ田畑大破損という有様となり、大榎木の下にあった足王様も流失し、死人や怪我人も出たかもれません。



このように考えると、題目石も決して木村七郎左衛門の気まぐれによるものではなく、災害のない天下泰平な世を祈る心が、題目石を介して、子々孫々に受け継がれることを願うものであったのです。このことを備中誌の編者が知れば、先とは異なる評価を戴けたことでしょう。皆様のお考えも伺いたいものです。

一郷流亡 新町誕生悲話



日近・弥高地内にある太田家の墓塔に、「明治二十五年七月有洪水一郷流亡」と刻みます。

この時、下流の大井村では急な出水で溺死者10余名、負傷者10名を数える惨事となりました。

左の写真、右上から左下にS字型に蛇行するのは今の日近川。中央の家並みは、日近銀座と言われた日近新町。その昔の家並みは安養寺下にありました。明治25年、家並は大洪水に見舞われます。川筋は中河原から安養寺下に移りました。つまり、日近新町は、明治25年7月豪雨災害の集団移転地として誕生したのです。

